
赤ちゃんポスト

ソーヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤ちゃんポスト

【Nコード】

N9262B

【作者名】

ソーヤ

【あらすじ】

「赤ちゃんポスト」という時事問題をヒントに作った短編。母親から育てることを放棄された赤ん坊がたどる人生を、ほんの少しのファンタジーを添えて描く。小説というよりは、詩に近い部分もあるかもしれません・・・

かくれんぼしてて、誰も見つけてくれない。

ワタシは暗闇で、モゾモゾした。

見つけるのあきらめたのかなあ。

それとも、ワタシが隠れていることなんか忘れて、みんなお家に帰っちゃったのかなあ。

ワタシには、記憶が無いはずだ。

だって、これから刻むことになってるはずだもん。

でも、なんでだろ。

夕日が沈みかけた頃、かくれんぼの終わりも知らないで空き地で震えている、可哀想な女の子が見えた。

遠くから、何か迫ってくるよ。

真っ黒な雲がワタシに覆いかぶさってくるよ。

こわいよう。

誰か、助けてよう。

ワタシを、独りにしないでよう。

言葉なんて知らないはずだけど、何千年もの間叫ばれてきた言葉、言語は違っても共通のものを指すその言葉。

・・・タスケテ、オカアサン。

見たこともない風景。

勿論、何か見えてるわけじゃないよ。

ワタシは、自分の住む世界が変わったことを全身で感じた。

でも、ひとつだけ安心なことがあったよ。

それは、ワタシがさっきまでいた世界を離れることはあっても、それはすぐ近くに、ずっといるんだって。

いつまでもじゃないけど、見守っていてくれるんだって。

ワタシと同じ旅人から、そう聞いた遠い記憶がある。

不安になった。

何かが、おかしい。

ワタシは、自分の出てきた元のセカイに抱かれた。

ホントなら、何よりもうれしい一瞬のはずだ。

なにかの、ボタンの掛け違い。

ワタシの心臓と、ワタシの出てきたところのそれとは、ぴったりと触れ合った。

拒絶。不安。

聞いていたのと、違う。

ワタシの体は誰かの肉体に包まれて温かったけど、それはあくまで温度の世界。

何か推理すると真っ暗な海に沈みそうで、ワタシは何か考えるのをやめた。

いくらかも日が経たないうちに、私はもとのセカイと離れた。

考えないようにしていたけど、このセカイに出てきた瞬間に、どこかで覚悟はしていたことだ。

これから私は、この太古から受け継いだ魂の知識を、思考をこれで封印することにする。

今からワタシは、何も知らない、「赤ちゃん」として、大きな川の流れに弄ばれながら生きていく。

もしかしたら、この子の自我が、向かってくる世界に打ち勝てるかもしれない。

ワタシはそれに賭けてみる。

この子を信じる。

また、眠りにつこう。

一世紀もしたら、この記憶は誰かの誕生とともに覚醒するのだろうか。

それとも、この子はそれまで生きているだろうか。

タカシい、なんでだよお。

なんで、来てくれない。

17歳の私にとって出産とは、言語を・そして想像を絶する恐怖だった。

死ぬかと思った。いや、死んだほうがマシ、とさえ思った瞬間があった。

散々ジェットコースターに振り回されて、全てのコースを回って帰ってきた、体を固定していたバーが上がった時のような安堵感と幸福感に包まれた。

今まで赤ん坊というものを、しかも新生児というのを身近で見た経験に乏しかった私は、一般的なまるまるとした、目のクリツとしたかわいいイメージばかり先行していた。

ものを知らない女子高生だと言われれば、その通りだ。笑いたきや笑いなよ。

今見るこの子は、しわくちゃだ。

なんか、ものすごい。

私は、圧倒された。

見た目がカワイイ、なんていいにくいけど・・・違うな、カワイイという語彙じゃ表現できないんだ。

うまく言い表せる言葉なんて、日本語にない。

イノチって、すごいな。

私は、宗教なんて縁がない。もちろん、カミサマだって信じちゃいない。

でも、私はなにかに畏怖の念を抱いていた。かしこまっていたよ。大昔の人が自然を崇拜してたって聞いた。私は、それってなんかバカにできないことだな、ってこの子見て思った。

この子の生物学上の父親、タカシはついに私の出産に立ち会わなかった。

ワタシ、思いつきり泣いたよ。この子を看護師に預けたあとで。そりゃあもう、子ども時代から今までの量を合わせたのと張り合えるくらい、涙がでたさ。

どっちが赤ん坊か分からないくらい。

セックスを甘く見た。

好きだから・・・その思いがセカイで至上のものだと思って、ほとんど迷いがなかった。

今思えば、ある意味それも何かの新興宗教みたいなもんだよね。目が覚めた私は、生命の神秘という、恐れ多いものに無知にも楯突いた。そして自らの愚かさを見せ付けられ、カラダという存在を超えて魂の底蓋を木っ端微塵に破壊されたような気分だった。

しかし、もう取り返しがつかなかった。

私は、母親というものに会ったことがない。

物心ついたら、養護施設、というものにいた。

父さん、母さん。

ドラマやコマーシャル、学校で読む教科書で、家庭というもののことを聞く。

施設では、できるだけその雰囲気になしようと頑張ってくれている。季節ごとのイベントも多い。みなそれぞれの誕生日だって祝ってくれる。職員のお兄さん、お姉さんは優しかった。

でも、何かが物足りなかった。

何故だかわからない。そういう時、何度も頭の中で繰り返されるイメージ。

それは・・・

・・・夕日が沈みかけた頃、かくれんぼの終わりもしらないで空き地で震えている、可哀想な女の子。

それは、私自身なのだろうか。

高校生になって、私は施設のある男性職員に肉体を奪われた。力ではかなわなかった。私は、首から下の思考チャンネルを切り替えた。

浮かんでくるのは、あのかくれんぼの女の子。

悲しいとか悔しいとか、そういうことは分からなかった。

ココロとは関係なく、私は上から涙を、下からは血を流した。

その職員は、つかまったよ。

ある日の新聞の片隅に、記事が載ったという。

私はそんなこともうどうだっていい。その記事さえ読んだことはない。

はやく、こんなところ出てやる。

そして、自分のチカラで生きてやる。

そう思っ、大して世間も知らない小娘がいきがつてもがいていた時に、タカシと出会った。

彼は、優しくかったよ。ワタシに、とてもよくしてくれた。

一緒によく入ったマック。彼が連れて行ってくれた夏の海。今でも忘れないよ。

でも、ワタシが傷ついていたら、人並み以上に寂しかったから、彼の優しさが本当の価値以上のものに見えたのかなあ。

今となつては、彼が父親であるということから逃げたというその現実打ちのめされていた。

私の後見人は、弁護士を通して彼との裁判さえ考えていた。

そんなことは、半分どうでもよくなっていた。

ワタシなんか、生きて何の価値があるのさ。

・・・育てられっこ、ない。

私は漠然とそう思っていた。

母親なんて、どうやってなるのさ。

何の覚悟もなかったさ。

タカシが、ダイジョウブだっていうから。私も、まあいっかくらいで受け入れた。

子育ては恐ろしく手がかかってタイヘンだって、そういうことだけよく知っていた。まさか自分が生むとはね。

私は、墮ろさなかった。

なんでだろ。

周囲も、首をかしげていたし、私自身もヒトに満足させられるような言葉を持たなかった。

この子を殺したら、私自身が死ぬよりも恐ろしい目に会う。

そして、一生後悔する。

オンナとして、レイプされるのと同等の、あるいはそれ以上の荷を負うことになる。

理由はわからない。何故かそう思った。

看護師さんが、私の赤ちゃんを連れてきてくれた。

「赤ちゃん」という言葉のそのものの語感を始めて実感した。ホント赤いや。

私は、ベッドの上で体を窓側にずらし、赤ちゃんの寝れるスペースを作った。

そして、横向きの姿勢で赤ちゃんの顔をマジマジと見つめる。

ごめんね。私みたいなのから生まれてきて。

私、母さん知らないんだ。

だから、どんな風にしてあげたらいいか、分からない。

教えてくれないかな。

その通りにするよ。何でもするよ。

だから、どんな風に母さんすればいいのか、教えてよう。

突然泣き出した私に、担当医と看護師がびっくりして飛んできた。二人は言葉も無く、私を見つめて立ち尽くしていた。

赤ちゃんは、スヤスヤ眠り始めていた。横でこんなにうるさくし

てるのに。

「いつてきまーす」

ボタン、とドアの閉まる激しい音。

私は、二階のベランダで布団を干していた。ここからでも、娘の駆けていく姿が見える。

いつも早く起こしてるのに、まったく。

いつの間にやら、娘も私が彼女を産んだのと同じ年齢に成長していた。

そんなに走るくらいなら、もっと早くに準備して、余裕を持って出ればいいのに。

娘は恐ろしいスピードで、視界の中を小さくなっていく。

風を切る速さに、制服のスカートが後ろにたなびいている。

・・・成績はともかく、カラダだけは丈夫に育ったもんだ。

私は、あれから施設を出た。

娘は、ゼロ歳児から受け入れてくれる保育園に入れさせてもらい、小さな会社就職をした。

体はものすごく辛かったが、保育園にこの歳で預けざる得ないわが子を思って、耐えしのいだ。

そうこうするうちに、今のダンナにめぐり合い、美咲のことも受け入れてくれた。あ、我が娘の名前言い忘れてたね。

私は、男の人に体を抱かれることが嬉しいと思える日が再び来るとは思っていなかったよ。

お母さんを知らない私でも、よくここまでこれたものだ。

布団を干し終えたので、一階のリビングに降りた。

つけっぱなしだったテレビからは、「赤ちゃんポスト」のニュースが流れていた。

それを聞きながら、深くため息をひとつついた。

電話が鳴った。

この時間なら、お隣の矢口さんか、町会長さんかなあ？
何気なく受話器を上げた私は、そのまま凍りついた。

こんな大きなホテル、落ち着かない。

普段そんなところに行きつけない私は、かなり豪華なホテルのロビーでまごまごしていた。

エントランスをくぐると大きな吹き抜けになっていて、手前に受付、窓側にカフェテラスがある。

そこが待ち合わせ場所だったので、とりあえずコーヒーを注文して座った。

ゲ。コーヒーだけで500円？

ワタシの出入りする世界じゃないなあ、と苦笑した。

その時、私の後見人だった人に連れられて、独りの中年女性が連れられてきた。

私は、手にしたコーヒーカップを落とした。

誰かは知らない。

いや、知っていた。

目が合った。

二十数年の時が逆戻りした。

次の瞬間、私の体は宙を飛び、彼女に抱きついた。

私の中の、かくれんぼの女の子は、「みいーつけた」と言われて、笑っていた。

エヘヘ。私を忘れてかくれんぼ、終わっちゃったわけじゃないんだあ。

よかったあ。

「よかったね」

どっからか声がした。

どこだろ。

私の中だ。誰か知らないけど、ありがと。

・・・なんでそんなこと思ったのか分からないけどこうつぶやいた。

ワタシを信じてくれて、ありがと。

放浪の旅人はようやく、安住の地を見つけたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262b/>

赤ちゃんポスト

2010年10月8日15時52分発行